HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スミス再生産論における問題點(1)
Author(s)	石垣, 博美
Citation	北海道大學　經濟學研究, 10
Issue Date	1956
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31023
Type	bulletin (article)
File Information	10_P15-32.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

スミス再生産論における問題點 (1)

石垣博美

はしがき

『国富論』第二編に展開されているアダム・スミスの再生産論については、すでに多くの論者がさまざまの角度から、それぞれ綿密な分析を加えており、いくつかの権威ある貴重な研究を発表されている。したがってこの主題にかんするかぎりもはや異論の余地がないほど論じつくされているかのようである。にもかかわらずここに、あらためてこの主題をとり扱うについては、第一に、スミスが第二編を通じてその資本観、社会の収入論、生産的労働と不生産的労働による資本蓄積論などの問題について論及しているのにたいして、これを再生産論ということばで一括するばあい、このことばの概念内容が多種多様であり、かつそのなかにふくまれる箇々の範疇や論点の扱い方もまちまちであるために、スミスの所論にたいする評価が必ずしも確定されていないからである。しかも第二に、論者が一様に指摘しているごとく、第二編の中心的テーマが再生産論であるにしても、それではこの再生産論が、「国富論」全体においていかなる地位を占め、さらに古典経済学の発展のうえでいかなる学説的意義を有しているのかという問題について

も、これまた必ずしも明確には答えられていないように思われるからである。そこで本稿では、この一見解決済みとも思われるテーマをめぐつて右のような問題意識からスミスの所説を検討すると同時に、さらにこれを手がかりとして、一般に再生産論における理論的諸規定の一端を多少とも明らかにしたいと思うのである。

一

周知のごとく『国富論』第二編は、「資財の性質、蓄積及び用途について」というその表題が示すとおり、「社会の一般的資財」の分析を直接の対象としている。(註)そのばあい「資財」とは、まさに一般的資財であるがゆえに、「社会の一般的資財の一種特別な部門としての貨幣」はもとより、「二つの資格において作用する」ところの、生産的労働を雇傭する資本および「他の誰かに貸出される」貸付資本とを包含していることに注意しなければならない。いいかえれば、スミスの「資財」なることばには、包括的なる意味における資本、さまざまな形態をもつところの資本が含蓄されているのである。

(註) Adam Smith, "Wealth of Nations" Cannan's ed. pp. 259-355 岩波文庫版、㈠四ページ―一八〇ページ、スミスは、第二編を展開するにあたつてみずからこの編を構成する五つの章に解説を加えている。それは大別すれば、㈠資財(ストック)の性質、㈡それが諸種の資本(キャピタル)として蓄積されるその効果、㈢これらの資本の種々なる用途の効果の三つのテーマになる。したがつて、第一章(資財の分類について)、第二章(社会の総資財中一種特別の部門としての貨幣、すなわち、国民資本の維持費について)は上の㈠の項目に、第三章(資本の蓄積について、又は、生産的及び不生産的労働について)、第四章(利子附で貸付けられる資財について)は上の㈡の項目に、そして第五章(資本の種々の用途については)は上の㈢の項目に、それぞれ帰属すると考えてよい。Smith, ibid., p. 260 邦訳、九ページ。

序論においては、まず文明社会においてブルジョア的富を基礎づける分業の発展とともに、必然的に「資財の蓄積」

が要請されてくる次第が簡潔に叙述され、これにつづいて、分業の発展と資財蓄積の増加というこの二つのモメントによる相互的展開は、富の増大を促進するということが強調される。しかもそのさい力点は、「資財の蓄積」は「産業活動の量の増加」＝雇用労働者数の増大をひきおこし、その結果「労働の分化、細分化」がおこなわれ、かくして実現される分業の進歩は、機械採用による新しい生産方法をつくりだしてゆく側面におかれている。(1)

右のごときスミスの論述のなかに、われわれは、かれが「資財蓄積の増加」という範疇でとらえたところのものは、じつは、生産資本の形態で実在する生産在荷の絶対的増加を指摘したものであることを知る。(2) 生産規模が拡大され、分業、機械等による労働の生産力の増進とともに、資本の再生産過程に入りこむ原料、補助材料などの分量は、この過程の連続性を中断なく保証するためには、絶対的に増加しなければならない。そしてこの生産在荷としての「資財蓄積の増加」が、ふたたび労働の生産力を促進する決定的要因だと、スミスは考えたわけである。したがってここですでに資本一般の再生産の問題が提起されているのである。

(1) Smith, ibid, pp., 259-261 邦訳、五—九ページ。

(2) もっともスミスは、「在荷形成は資本制生産に独自な一現象だという、荒唐無稽な見解」(Marx, Kapital, II. S. 134 長谷部文雄訳、(5)二六五ページ)を保持していたために、在荷そのものを在荷の諸形態から区別することができなかった(Marx, ebenda, S. 135 邦訳、(5)二六六—七ページ)のであるが、しかしこのことは、生産資本としての在荷の理論的把握をすこしもさまたげない。もちろんスミスの「資財蓄積」という規定は、そのなかに個人的消費元本の形態の在荷も含まれているのであって、必ずしも本文で述べた生産在荷に限られるものではないから、それほど厳密なものではない。(Marx, ebenda, S. 136 邦訳、二六八—九ページ)。

つぎに第一章前半においては、まず「労働のみから収入をうる」人々としての「労働貧民」以外の資財所有者にとっては、「資財」は二部分に分割され、一は「収入をかれに与えると期待される部分」、二は「かれの直接の消費をみたす部分」(これはさらに三つの部分に分けられる)であるが、さらに前者は「資本(キャピタル)」とよばるべきものであって、

流動資本と固定資本との二種類が指摘される。そしてスミスは、職業（オキュペーション）が異れば、それに要する固定ならびに流動資本の割合も甚しく相異なるとして、(1)商人の資本、(2)親方工匠または製造業者の資本、(3)製鉄所、炭坑、各種の鉱山等の資本、(4)農業上の資本の実例にふれつつ、右の二種類の資本規定を補足している。(1)

右のごときスミスの説明から、われわれはさしあたりつぎの諸点を確認しておこう。すなわち第一に、ここでは資本（キャピタル）によつて獲得される利潤あるいは収益という観点からして個別的な資本の形態上の区別があたえられているけれども、じつはそういう形で個別資本の循環過程、あるいはそれの再生産過程が暗黙のうちに生産資本の立場からとりあげられている、いいかえると資本一般の再生産過程がいまや明確に問題とされていること、(2)第二には、ケネーにたいするスミスの進歩として、資本をば、それの特殊形態たる借地農業資本に限定する偏狭な見方から解放し、あらゆる形態の生産資本としてとらえることによつて、諸範疇を一般化したこと、および農業に由来する年々的回転と多年的回転とのあいだの区別のかわりに、時間的に相異なる回転の一般的区別を指摘していること、(3)第三としては、スミスによれば、生産手段の一部分たとえば機械器具等は、その現物形態を変えることなく、もつぱら漸次的に消耗されることによつて労働過程で役立つ（かれはこのことを、「その所有者または使用者に利潤をもらす」というふうに表現している）のであるが、他の一部分たる諸材料は、その姿を変え、しかもまさにそれが姿を変えることによつて生産手段としての自己の使命を果すのだということが固執されるが、そのばあい、労働過程における生産資本の諸要素としてのこうした差異は、固定・流動資本の区別の出発点であつて、使用価値上の質料的要素の区別をしたかぎりでは、スミスの指摘は必ずしもまちがつていなかつたことである。(4)

(1) Smith, idid., pp. 263-264 邦訳、一〇—一四ページ。

(2) 第一章前半におけるスミスの敍述から再生産を取り扱つている代表的箇所を引用しよう。「親方工匠の資本のほとんど全部は、あ

るいはかれらの職工にたいする賃銀として、あるいはまたかれらの材料の価格として、流通し、その製作品の価格となつて、利潤とともに償還されるのである」Smith, ibid., p. 263 邦訳一二ページ。マルクスの詳細な批判に明らかなごとく、スミスは一方でケネーの伝統をうけついで生産資本の立場に立脚しながら、他方ではこの立場を見失つて、生産資本内部での資本の区別と、資本価値がその循環中に通過する形態的区別とを混同し、生産資本と流通資本とを同一視してしまう。Marx, ebenda, S. 188 邦訳、三六三ページ。なおスミスにおける生産資本の規定については後述を参照されたい。

(3) Marx, ebenda, S. 185 邦訳、三五七ページ、および S. 364 邦訳、六八二ページ。

(4) もとよりこれだけでは十分でない。すなわちこの質料的区別には、価値交附上および価値填補上の区別が対応することをスミスは見おとす。のみならず、かれは、このために固定・流動の資本の区別はもともと諸物に属するところの性格だとする資本物神性にさえおちいることになる。Marx, ebenda, S. 198 邦訳、三八一ページ。

さてこれにつづく第一章後半においては、個人の資財における資本の分類は、スミス独特の流儀にしたがつて、一国または一社会の総体の資財にそのままあてはめられ、やはりそこでも(1)直接消費のための部分、(2)固定資本、(3)流動資本の三項目の区別がとられる。具体的には、(1)は「直接の消費にとつておかれる部分であつて、その特色はなんら収入または利潤を生じない点にあり、それは本来の消費者によつて購入せられ、しかもなおいまだ消費されない食料・衣服・家具」等を意味し、(2)は(a)有用なる機械・器具、(b)収入を生む建築物、(c)土地の改良、(d)社会の全住民または全員の習得せる有用なる才能に区別され、さらに(3)なる項目は、(a)貨幣、(b)それを売つて利潤を得ようと考えている食料の貯蔵品、(c)衣服・家具および建築の材料、(d)商人または製造業者の手にある完成した製造品、よりなりたつている。そしてこのあとは、これら三種類の資本が相互に関連して互いに補足しあうところの資本の運動過程の分析がなされている。これを要約すれば、まず(1)直接消費用の資財が供給される源泉は、固定資本ならびに流動資本である、(2)固定資本の供給源は、「一種の流動資本」であるが、これが収入をもたらすためにはいつでも流動資本を必要とする、(3)つぎに流動資本（貨幣をのぞく）についてみると、「年々あるいはそれより長い期間か短い期間のうちに、

これらは、規則的に流動資本の内から引き去られて固定資本の内に、または直接の消費として留保せられる貯えの内に編入される」、この資本（貨幣をふくむ）の供給源としては、三つの源泉たる土地、鉱山、および漁場の生産物が指摘されるが、これらの経営にはふたたび固定ならびに流動資本が必要である、(4)そこで、農業者と製造業者とのあいだに、食料および原材料などの粗生産物と製造された完成品との交換がおこなわれることによつて、この必要がみたされるということになる。(1)

叙上のごとき社会的総資財の区分ならびに諸資本間の相互的質料補填の関係の展開については、理論上多くの誤謬や混乱がみられることはいうまでもない。(2)しかしながらわれわれはここで少くとも、スミスの右の論述によつて固定資本と流動資本との二つの資本範疇にもとづき、社会的にみた、これらの資本と直接消費用の資財とのあいだの質料上の補充と循環の関係、すなわち社会的総資本の再生産過程が明らかにされている点に、注目しなければならない。(3)

(1) Smith, idid, pp. 264-269 邦訳、一四―二二ページ。

(2) 固定・流動資本なる性格を諸物に属する性格だと解する物神的把握、生産資本と流通資本との混同などのほかに、労働力把握上の混乱にも注意しておかなければならない。スミスにおいては、流動資本とは、じつは流通資本の別名にほかならないが、しかるに労働力は、それが市場で流通するかぎりでは資本でもなく、商品資本の形態をとらない。それゆえ、かれのいう流動資本の項目にこれを入れることができないばかりか、「習得された有用な諸能力」として固定資本の一項目にあげられることになる。さてそこで、可変資本は、ここでは労働者がかれの貨銀をもつて購買する諸商品（生活手段）の形態で登場する。「労働力に出資された価値でなく、労働者の生活手段に出資された価値が生産資本の流動的構成部分として規定されることによつては、可変資本と不変資本との区別の把握が、かくして資本制生産過程一般の把握が、不可能となる。この資本部分は対象的な生産物形成者に出資された不変資本と対立する可変資本だという規定が、労働力に出資された資本部分は回転関係では生産資本の流動的部分に属するという規定のもとに埋没される。この埋没は、労働力の代りに労働者の生活手段が生産資本の要素として数えられることによつて完全に行われる。」Marx, ebenda, S. 210 邦訳、四〇三ページ。

(3) 第一章後半には多くの混乱がみられるが、それにもかかわらず一方ではこれを覆す正しい規定が見出される。たとえば、ある特定のもの、直接消費用の家屋のごときものは、その所有者に収入をもたらすことがあり、それによつて一種の資本たる機能をなすと述べることによつて、資本という属性は諸物としての諸物に属するものではなくして、それが一定の関係におかれたばあいに生ずる一機能だという正しい認識などが、それである。Smith, ibid., p. 264 邦訳、一四—一五ページ。

第二章においては、まず、社会の総資財（土地および労働の年々の生産物の総額）は、個別的商品と同じく賃銀、利潤、地代の三つの収入部分に分解されること、かくして、総収入と純収入との区別がもちこまれることによつて、前者は社会の総生産物を意味するが、後者は、固定資本と流動資本との維持費を差し引いて後に残るところの自由な収入、いいかえれば資本を蚕食することなく消費用の資財に編入される生活必需品、便益品、娯楽品に使用されうる収入をさすこと、さらに、この社会の純収入から除外されるべきものとして、(a)固定資本の維持費、(b)流動資本たる貨幣、食糧品、材料および完成品の四種のうちの貨幣の維持費、および後者三種のうち固定資本に規則的に編入されるべき部分、これらがかぞえられなければならないこと、が順次に説明され、つづいてこの章の本来のテーマである貨幣の性質・作用および信用の問題が論究されている。(註)

(註) Smith, ibid., pp. 271-313 邦訳、二四—一〇四ページ。第二章の後半の部分で展開される、スミスの貨幣・信用論について略記するならば、そこではまず、固定資本と流動資本としての貨幣とは、社会の収入に影響する点にかんするかぎり、(1)両者の維持費は、社会の総収入の一部ではあるけれども、純収入からの控除費目であること、(2)いずれもそれ自体は決して収入をなすものではないこと（ここではとくに流通の大車輪たる貨幣は社会の収入とは無関係なることが強調される）(3)さらに両者ともその維持費の節約は、純収入の増加となることの三点において、きわめて類似していることが指摘される。しからば、貨幣の節約はいかにして社会の総収入および純収入を増加させる傾向をもつのか。これにたいして、紙券による節約、このばあい「流通の水道」から溢れた貨幣は、(a)国外に出て中間貿易を営むことによつて、純収入の増加に寄与する、(b)国内消費用の外国品の購入にあてられたばあいは浪費を促進し、支出を増加する結果を招くから、社会にとつて有害である、(c)しかし、勤勉なる人々を維持・使用する材料、器具、

食料の国内消費を供給したばあいには、かれらがそれらの材料に附加した価値額だけ純収入は増加される、また金銀貨幣に紙幣が代置されるならば、この金属貨幣額だけ、流動資本の総額は増加する、ことが主張され、つぎにこの役割を果すものとして銀行制度および銀行券の諸性質が詳細にわたつて説明されている。これらの諸指摘は、スミスの信用論として重要なものであるが、ここでは詳論のかぎりでない。ただ第二章の主たるテーマは、流動資本として貨幣にかんするものであるから、この点にまでまたがつていると考えられる。

ところで右のスミスの収入論のなかには、いくつかのきわめて重要な命題がふくまれているが、われわれはここで少くともつぎの諸点はこれを学びとらなければならない。すなわちスミスは、総収入と純収入との区別をなすことによつて、社会的生産物の総価値の一部分は、賃銀、利潤、地代のいづれにも編入されず、再生産元本としての機能資本の維持に向けられなければならない、いいかえれば社会的総生産物は、個人的収入としての消費フアンドと資本収入としての再生産フアンドに分解されるとする見解を展開し、これによつて社会的総資本の単純再生産過程における基本的モメントを把握していることである。(1) さらにこれと関連して、周知のように、二つの種類の労働、すなわち固定資本素材（生産手段）を生産する労働と、消費材を生産する労働との区別がはつきりと示されていることである。もつともスミスにおいては、この区別は、生産手段を生産する労働者の労働の価格は、結局かれらの直接消費用の資財に投じられうるところから、純収入の一部分となるに反し、消費資料を生産する労働者のばあいには、労働の価格（すなわち賃銀）もその生産物も、ともに消費用の資財に入りこむという形で議論されているのであるが、(2) それはともかくここにスミスは、社会的資財の補償の過程を生産手段部門と消費手段部門とに分けて考察する途をひらいたのである。

(1) しばしば引用されるつぎの有名な章句を参照せよ。「ある大国のすべての住民の総収入とは、かれらの土地および労働の年々生産物の総額をいう、純収入とは、第一にはかれらの固定資本の、第二にはかれらの流動資本の維持費を差引いて後に残る自由な収入

をいう、いいかえれば、これは、かれらの資本を蚕食することなくしてかれらが直接の消費として留保しておく資財に編入しうる収入、すなわちかれらの生活必需品、便益品、娯楽品に使いうる収入である。かれらの実質的富も、また、かれらの総収入に比例するのではなくして、かれらの純収入に比例するのである。」Smith, ibid., p. 271 邦訳、二五—二六ページ。マルクスはこれに関連して、「商品価格を……賃銀、利潤、地代に分解したあと、なんとかこれは、まわり途をして、第四の要素すなわち資本たる要素を密輸入せねばならないのだ」とのべ、「スミスは総収入と純収入との区別という言葉上の遊戯によつて、かれじしんの理論から逃避している」と評しているが、しかしたとえそれが「レヴェニュー」なる言葉の二義性（このばあいには、通常の資本収入mと資本家の消費ファンドとの二義性ではなくして、一般的にいう収入と文字通りの意味のレヴェニュー〔revenir〕とのそれである）から導き入れられたものであろうとも、第四の要素を把握している点は評価されるべきである。Marx, ebenda, S. 366 邦訳、六八六ページ。

(2) 「固定資本の維持費の全額は、明らかにこれを社会の純収入から除外せねばならない。かれらの事業上に有用な機械器具、かれらの収益用の建物等を維持するに必要な材料も、それらの材料を適当なる形に捧えるのに必要な労働の生産物も、いずれも純収入の一部をなすものではない。けれども右のごとき労働の価格は、まさにそれの一部分でありうる、そのゆえは、そういう仕事に雇われた労働者は、かれの賃銀の全価値を、直接消費のために留保せられるかれらの資財のうちに投じうるからである。しかしながら、この他の種類の労働に至つては、その価格もその生産物もともにこの種の資財のうちに編入せられる」。Smith, ibid., p. 271 邦訳、二六ページ。なおこの章句の批判については、Marx, ebenda, S. 367—372 邦訳、六八八—六九七ページ。

以上、第一章から第二章にわたるスミスの論述の要旨と、そこにみられる理論上の特徴をいくつか指摘してきた。そしてかれがこの二つの章で明らかならしめようとした本来のテーマは、結局のところ社会的資本の再生産と流通の理論に帰着することが知られた。これを前提として、スミスは、これにつづく第三章において、第二編の最大のテーマである資本蓄積はいかにおこなわれるかという問題をとりあげ、生産的労働を基軸とする資本蓄積論（拡大再生産）を展開しているのであるが、われわれはここでひとまず、右の二つの章におけるかれの単純再生産にかんする理論的

諸規定について検討を加えておきたい。けだし主要な困難は、蓄積の考察においてではなくして単純生産の考察において現われるからである。

二

さて以上のようなスミスの再生産にかんする所論について考察するまえに、われわれは、そもそも再生産論といわれるものが経済学の基本的理論領域にあつて、いかなる論理的前提を必要とするものであり、また本来それはどのような内容をもつものであるか、そしてまたそれは経済理論の全範囲にたいしていかなる意義を有しているかという問題を中心にして、きわめて概括的な考察をあたえおくことにしよう。一般に再生産過程というとき、それは社会的生産過程一般の絶えざる反復と更新とを意味する。しかるに資本家的生産の支配する社会においては、このような意味の生産過程一般は資本という形式によつて把握されたものとしてあらわれ、資本という形態規定をうけとり、資本の生産過程に転化される。したがつて、流通過程という特殊歴史的な形態によつて補足されることなしに、生産過程は存在しえないものとなる。すなわち、資本家的生産を基礎とする社会のうちでは生産過程の反復としての再生産過程は、生産過程と流通過程との統一的過程としての意義をもつ資本の再生産過程となつて現れるほかないのである。それゆえに、経済学の一般理論における再生産論は、資本の再生産過程のなかに包含されているところの、生産過程と流通過程との二つの契機における理論的諸規定を前提することによつてはじめて展開されうるものである。そこでいま生産過程の分析を別にすれば、いうまでもなくこのばあい理論上の前提として必要とされる諸規定としては、さしあたり資本の循環諸形態と資本回転から生ずる資本の形態的区別との二項目をあげることができる。(1) 前者についていえば、ひとたび資本として措定された、自己増殖をおこなう運動体としての価値が、現実に運動を展開してゆくばあ

いに必然的に展開するところの形態として、貨幣資本の循環、生産資本の循環、商品資本の循環の三つの側面があたえられるのであるが、この三面の展開をみるとそこでは、まず貨幣資本の循環という価値的内容をもち価値増殖を規定的目的とする主観的な包括的規定があたえられるが、これに反して第二の生産資本の循環形態は、使用価値的内容をもちもつぱら過程の連続性を目的とする客体的な資本の運動形態として展開され、そして最後に、これらの二面を統一性において止揚するところの資本形態として商品資本の循環形態があらわれる。ここにいたつてはじめて、流通過程（第一の循環形態の積極的側面）と生産過程（第二の循環形態の積極的側面）とが相関的・相互制約的モメントとしてとらえられ、こうして資本の循環形態は十全なる意味において定立されるとともに、われわれはこの商品資本の循環形態においてはじめて社会的総資本の考察の必然性を見出すことができるのである。つぎに資本の回転から生ずる資本形態の区別の論点においては、さきに展開された生産資本の立場によりつつ、それを構成する種々の生産諸要素の回転様式の差異から発生する資本形態の区別が論究されていることは、いうまでもない。

これらのものを前提として展開される資本の再生産論は、資本一般の再生産と蓄積、資本家的蓄積の一般的法則、および社会的総資本の再生産過程を対象とするところのいわゆる表式論の三つの段階に区分することができる。[2] すなわち(一)資本一般の再生産と蓄積の分析としては、資本の再生産過程が社会存立の絶対的基礎である生産手段と生活資料の再生産過程を実現してゆくばあいに、いかなる形態でこの条件をみたしてゆくか、またそれと同時に、この社会に特有な人間関係をいかに再生産してゆくかという課題が中心とされる。このばあい剰余価値の資本への転化という資本の必然的契機は、資本の再生産過程の展開のうちにはじめて明らかになる。(二)だが、資本の蓄積過程は、たんに生産過程にふくまれる物的諸要素の量的拡大によつてのみ、その条件を満足されうるものではない。すなわち、生産手段の量的増大は、一方における生産過程の主観的要素としての労働力の量的増大を必至ならしめる。けれども生産

手段の量的増大は、必ずしもそれに比例した労働力の量的増大を必要とせず、資本の有機的構成の高度化は労働力の増大をば生産手段の量に比しては相対的に減少せしめる作用をおよぼすと同時に、他方ではこの労働力の数量を絶対的に増加させる。ここに、資本家的生産様式の内部における特殊な人口法則の基礎があたえられる。(三)こういう労働力の再生産の機構を通じて、資本が自己の運動にとつて必要不可欠な条件を確立するとすれば、資本にとつての制約は、資本の生産物が流通過程においてその価値を実現するかいなかにかかつてくる。社会的総資本の再生産と流通は、資本一般のこうした制約がいかなる法則によつて解決されているかを明らかにするものであり、したがつて、再生産表式論なるものの意義は、社会的総資本の再生産過程が、あらゆる社会に共通な再生産の原則を商品形態を通じていかに実現するかの条件＝法則を明確ならしめることを課題としている点に存するのである。

しからば叙上のごとき再生産論上の個々の課題が、スミスの学説のうちでどのような形でどの程度まで明らかにされているか、以下、右のような分析視角にもとづいて、(1)再生産論の理論的前提としてのスミスの資本観、(2)資本一般の再生産の把握と蓄積論、(3)労働力の再生産の問題（可変資本の把握にかんして）(4)社会的資本の再生産と流通、(5)これら資本観、蓄積論を一貫する基本的見地としてのスミスの労働価値論、という順序で考察を加えてゆきたい。

(1)　『資本論』第二巻「資本の流通過程」においては、まず第一編において、資本が循環中にとる種々の形態、およびこの循環そのものの種々の形態が考察され、第二編においては、その循環が周期的なものとして、すなわち回転として考察される。これらの諸編が個別的資本の流通形態を分析しているのに反し、第三編はこれら個別的資本の総体よりなる社会的総資本の流通過程が考察の対象となつている。このばあい、第一編が、商品資本の循環形態において社会的総資本の考察の必然性を規定しているところから、第三編の理論的前提をなすことは、いうまでもないが、第二編も生産資本内部の資本の第二義的な区別を明らかにし、これが商品資本の構成部分の価値填補ならびに質料填補の立場から考察される社会的総資本の再生産過程においては、直接問題となりえない点を指摘していることから、やはり第三編にたいして同様の関係にある。

(2) いうまでもなく、『資本論』第一巻第七篇においては、「蓄積」は「抽象的に、換言すれば直接的生産過程の単なる契機として」考察されている。したがつて、資本の再生産および蓄積過程は、より現実的に「流通の媒介的運動」を前提として展開されることも可能である。ただそのばあい、「蓄積過程の単純な基本形態」が見失われてはならない。なおこの点については、宇野弘蔵著『経済原論』上巻第二篇第三章「資本の再生産過程」を参照。

三

スミスが生産資本の立場から産業資本の循環を観察していたことは、かれの経済理論の全体を貫いている特徴であるといわれる。そこでさしあたり第二編の叙述のなかから、スミスのこうした資本観を裏付けるような文章に着目してかんたんにこの点を確認しておくことにしよう。既述のとおり第二編第一章においてスミスは、まず資本（キャピタル）を規定して資財のうちの「収入をあたえると期待される部分」、すなわち食料品、材料、道具などから構成される資財からして「自己維持に必要なもの」を控除した残りの過剰部分であるとしている。(1) したがつてこのさい資本と規定されるものの具体的内容は、やはり食料品、材料、道具の三者から成りたつていることに変りないのであるが、問題は、これらのものがスミスの理論のうえでなにを意味しているかという点に存する。右の規定につづいてかれは、この資本が「それを使用する人々に収入また利潤をもたらすように使われる方法」として、第一に流動資本をあげ、第二に固定資本をあげているが、さらに生産諸部門の異なるに応じて両資本の量的比率が区々である事情に説きおよび、そのさい、親方工匠の資本においては両資本のうちの流動資本部分が多くのばあい比較的多量であるが、この流動資本部分は、その内容を形成する賃銀と材料の価格として流通し、その結果製作品の価格となつて利潤とともに償還されるとなしている。(2) したがつてこれを前記の論旨と結びつけて綜合するならば、資本の内容をなす食料品、材料、道具はそれぞれ流動資本としての賃銀と材料、固定資本としての道具を意味するものであることが知られる。もちろんさきに

も指摘したとおり資本区別上の混乱はあるのだが、ともかくこうしてスミスは、直接的生産過程に存在する資本の客観的要素たる生産手段としての材料、道具とならんで、その主観的要素たる労働力（スミスはこれを食料品として把握している）[3]とに注目して、生産諸要素を資本（キャピタル）だと規定することから出発している。すなわち、資本規定における混同や欠陥は少なくないにしても、スミスが生産過程に属する生産資本の形態を区別するという観点に立脚していたことはたしかであろう。[4]

ところで以上のところまでは（第一章前半）スミスにおいては、事実上主として商業、工業、農業などの種々の生産諸部面における固定、流動両資本の割合について論じられているのであるが、このばあいその議論は個別的資本にかんしての資本規定をめぐつて展開されているものとみてよい。しかるにこれにつづいてスミスが、かような個別的資本における資本規定をそのまま、社会的総資本についても適用されうるものであるとして、さらに具体的な資本規定の内容吟味にうつつていることは、さきにふれたとおりである。そこでは、社会の種々なる生産諸部面における資本規定を一括することによつて、総体的な総資本の構成部分がより具体的に論じられているけれども、しかしスミスの観点が、生産在荷の形態における生産資本および直接的生産過程における生産資本に着目して、その範囲で資本規定をしようとしている意図は一貫されているのである。といつても、序論から第一章後半にすすむにつれて、生産資本をとりあげて資本規定をする立場は次第に曖昧化されるにいたり、流通過程に帰属する資本形態の一つである商品資本、さらには貨幣資本さえも右の規定にひきいれようとする誤れる観点が顕著になつていることは、争われない。

(1) Smith, ibid., p. 262 邦訳一〇ページ。
(2) Smith, ibid., p. 263 邦訳一二ページ。
(3) 本稿二〇ページ註の(2)を参照。

(4) この点については、藤塚知義氏『アダム・スミス革命』の第四章第一節「スミス再生産論の構造」一〇一―一一四ページにおける詳細な分析を参照されたい。ただし藤塚氏においては、社会の総資財における物質代謝が論じられている第一章後半の部分から、スミスにおける生産資本の規定を抽き出されているが、生産資本という規定は個々の資本の循環にかんする規定であるから、個人の資財を中心とする第一章前半の部分から、それを帰結すべきではないかと思われる。

かくのごとく資本循環の考察におけるスミスの立場が古典経済学のすべてに共通する生産資本の立場であるとするならば、この立場からのみ資本循環の考察を固定化する視点からは、必然的にいかなる理論上の幻想が生じてくるであろうか。これを明白ならしめるためには、その準備としてまず生産資本の循環形式はどのような理論的意義を有しているかということを明確にしておく必要がある。

個別的産業資本の循環は、知られるとおり $G—W\cdots\cdots P\cdots\cdots W'—G'$ という形態によって代表されるが、これは、それがたえず反復されるものとしての現実性において観察されるばあいには、同時に他の二つの循環形式、すなわち生産資本の循環形式 $P\cdots\cdots P$ と商品資本の循環形式 $W'\cdots\cdots W'$ とを含んでいる。それは、これらの三つの循環形式を統一したところのものであるから、いずれかの循環形式を一面的に抽象して固定化してみても、それは産業資本一般の循環形式といえないばかりか、かえって積極的に誤謬を生ぜしめる結果となるのであって、それゆえに生産資本の立場にたつということじたいがすでに誤りなのである。だが、生産資本の循環形式によって産業資本一般が表現するところのものは、この資本がもっている重要な特徴をふくむのみでなく、逆にいえば、同時に生産資本の循環形式にたつことなしには、資本の重要な側面が明らかにされえないといってもよいのである。しからばほんらい生産資本の循環形式は資本のいかなる特性を表現しているであろうか。それは大雑把にいって二つの主要特徴に総括されるように思われる。[二]まず第一に、資本の再生産ということが、貨幣資本の循環形式 $G\cdots\cdots G'$ ではたんに可能性として

あたえられるにすぎないが、これに反して生産資本の循環形式 $P\cdots\cdots P$ ではそれが現実性としてあたえられるという点である。元来資本の目的は、剰余価値の生産であり、さらに生産された剰余価値の資本への転化すなわち蓄積である。だが生産された剰余価値は、流通過程において実現されなければならないのであつて、これによつてはじめて資本の目的も実現されるのである。$G\cdots\cdots G'$ の形態においては、その終結段階であるところの $W'-G'$ がまさにこの資本の目的を実現させる過程としてあたえられているからして、この形態はそういう意味で、増殖された資本価値の実現を表示する段階をもつて終結することにより、資本の目的にたいし形態的に完了しているという性質をそなえている。だからこそこの形態は産業資本の一般的範式を代表しうるのである。さらに他方では、$G\cdots\cdots G'$ の成果としての G' をとつてみれば、この増殖された資本価値の G 形態は、いうまでもなくそれじたいとしてみれば価値の自立的形態たる貨幣であつて、それゆえにいかなる使用価値上の制約からも解放された貨幣である。以上の理由から、$G\cdots\cdots G'$ にあつては、この循環はかりに一回限りの循環であつてもかまわないものであり、したがつてそれがあらためて循環を開始するかどうかは、ただ可能性としてあたえられているにすぎないことが知られる。すなわちそれは再生産をもつぱら可能的に表現するだけである。これに反し $P\cdots\cdots P$ の形態においては顕著な変化があらわれる。ここでは、まず最初の P が生産資本の成分である生産手段と労働力とによつて行われつつある生産過程であるのにたいして、終結の P は生産資本形態における産業資本の再定在にすぎない。すなわち前者は生産資本が機能しつつある生産過程であるが、後者はこの資本循環の最終の流通段階において行われた資本価値の労働力と生産手段とへの転形の結果であり、したがつていまだ生産過程を開始していないところの P である。けれども最終極 P が流通過程の直接的結果であつて、それゆえに P_m および A という商品形態をまとつていようとも、むろんこの P_m と A とはもはや資本価値の商品形態でもなければたんなる商品でもない。けだし、このばあいの P_m と A とは生産資本の再定在としての規定性をもつが

ゆえに、生産資本の機能を果すためには、使用価値的に制約された生産要素として定在せざるをえないからである。しかもそれらの生産要素は、それじしんの使用価値を生産的に消費することによつてのみ生産資本としての機能を遂行することができるのであるから、必然的に生産過程たる第一のPに移行せざるをえない。これを端的にいえば、最終極Pは新たに生産資本として機能し生産過程を遂行せざるをえない形態において存在するわけである。のみならず、資本の目的の実現という点からみても、この終結点のPは増殖された資本価値として存在するのではないから、それゆえこのPの形態にとどまる限り資本の目的は十分に達成せられない。かくして、形式的にも内容的にも終結点Pが開始点Pに移行しなければならぬ必然性をもつことは明白であつて、$P\cdots\cdots P$の循環形式が資本の再生産を特徴的に表現するのはこの必然性にもとづくのである。

〔二〕つぎに第二の主要特徴としては、生産資本の循環形式においては$W—G—W$という商品流通の一般的基礎が確立されることを指摘することができる。さきにもみたとおり生産資本の循環は、$P\cdots\cdots W—G'\cdot G—W\cdots\cdots P$という範式で表現されるのであるが、いま$P$を度外視しその流通過程だけをとつて純粋に形式的にみれば、それは$W—G—W$という単純流通に要約される。これは貨幣資本の範式が同様の操作によつて$G—W—G$に要約されるのと対照的関係にたつ。もともと$G—W—G$はそれじたい形式的にみれば矛盾をふくむのであつて、この過程がなんかの意味内容をもち一定の目的を有するためには、それは$G—W—G'$とならねばならない。そのばあいこの流通形式は、価値増殖という目的をもつ商人資本の形式であることがしられる。しかしこの流通形式においては、たといそれが産業資本の循環形式の一局面である貨幣資本のように自分自身のうちに生産過程を包含して、しかも連続的に反復されたとしても、$W—G—W$という形式は展開されえないのである。なぜなら、かりに$G—W—G'\cdot G—W—G'$という週期的更新において観察したばあいに、$W—G'\cdot G—W$があたえられるとしたところで、それはけつして$W—G—W$という形式に要約されえない性質のものであつて、依然として

$W—G'\cdot G—W$ にとどまるからである。[3] すなわち、$W—G—W$ という単純流通の形式があたえられるのは、生産資本の循環のように、それが生産資本の媒介的役割を果し、過程の目的たる生産にたいしてその流通過程たる $W—G'\cdot G—W$ が手段化されるばあいだけなのである。もつともこの循環形式といえども、第一の生産段階においては資本価値の自己増殖が遂行されなければならないがゆえに、価値規定をも考慮にいれるばあいには $W—G'\cdot G—W$ である。けれどもこの流通過程は、必然的に分離して $W—G—W$ と $\varepsilon—g—\varepsilon$ という形式的には二つの単純流通に帰着するのである。一般的商品流通というとき、それは右の諸流通のほかになお他の流通[4]を含むのであるが、これらいつさいの商品流通は、形式的には単純流通と少しも異ならない資本の流通を基礎とすることによつて成立している。したがつて、商品流通の一般的基礎は、生活資本にふくまれる $W—G—W$ の流通によつてはじめて確定されるのである。

(1) 「生産資本の循環は、古典経済学がもつて産業資本の循環過程を考察するところの形態である」Marx, ebenda, S. 82 邦訳、一六五ページ。しかしながらスミスの資本観の立場をいつでも生産資本だとしてしまうことには、大いに疑問がある。後述参照。

(2) 以下の敍述については、Marx, ebenda. ff. 59—82. 邦訳、一二二—一六五を参照されたい。

(3) $G—W—G'$ は、この過程が不等価交換であること、G が目的となつていること、反復の必然性があたえられていないことの諸理由から、単純流通の形式を基礎づけることが不可能であるが、同様な理由から（もつともこのばあいは理論的には少なくとも等価交換の過程ではあるけれども）、貨幣資本の循環形態もその基礎とはなりえない。しかるに生産資本の循環においては、まさに生産過程を媒介するものとしての $W—G—W$ が含まれているのである。

(4) いうまでもなく、資本流通の背後に前提されている労働力の価値の流通について考えるばあい、それは資本の流通に対応するものとしては $g—\varepsilon\cdot A—g$ となるけれども、やはり単純な流通である。けだし、この労働力の価値の流通も、資本流通に附随せる過程であつて、その目的は個人的消費だからである。

（未完）